近江の古城Ⅰ　甲賀郡の城跡

「城」という言葉からどのようなイメージをもたれるでしょうか。彦根城や姫路城のように華麗な天守閣があり、石垣や水堀といったものを想像されるのではないでしょうか。これらは江戸時代に築かれた近世城郭のイメージなのです。鎌倉時代から戦国時代にかけて築かれた中世城郭は、「城」という文字どおり土でつくられたもので、石垣もほとんど用いられておらず、まして天守閣などの高層建造物も存在しません。

近江国内にはこのような中世の古城跡が、1,000ヵ所以上存在していたようです。なかには発掘調査が実施された城跡もありますが、大半は土塁や空堀といった構造をみごとに残し山中に眠っています。

ここでは近江の古城をすべて紹介することはできませんので、おおよそ郡ごとに2～3の特徴的な城跡を紹介していきたいと思います。今回は甲賀郡の古城跡を紹介します。

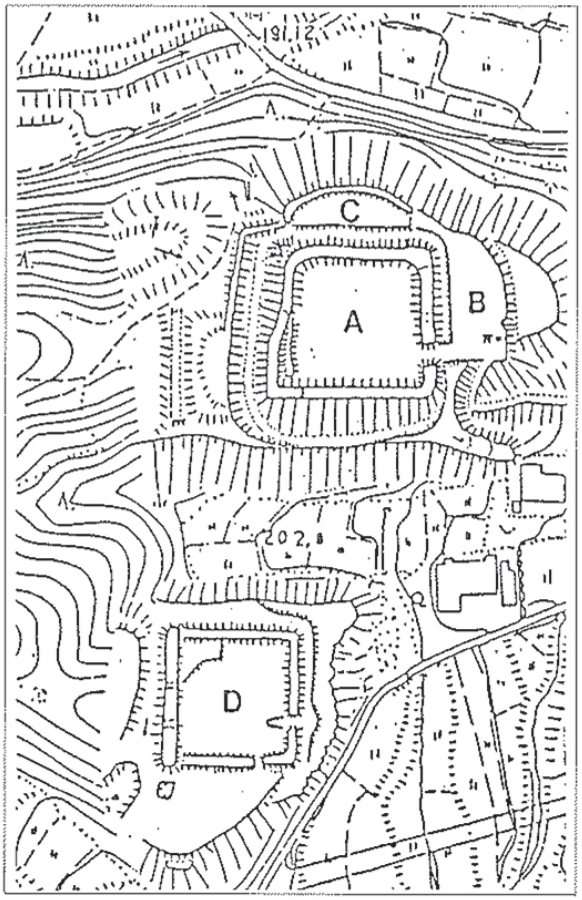
甲賀郡中惣（ぐんちゅうそう）

甲賀郡における中世の小領主の典型として山中氏があげられます。山中氏は13世紀中頃に鈴鹿関の警固に携わり、関に近い山中村（現土山町山中）や伊勢神宮領柏木御厨内上山村友行名などを所領していました。応仁文明乱以後、山中氏や他の領主たちは結束して同じ名字を持つものが「同名中」を形成し、さらにより広域的な紛争に対処するため、同名中は互いの対立を克服し、地域的に結合していきます。山中氏は伴・美濃部の二氏と柏木三方中と呼ばれる連合体を形成していきます。このような連合体が「甲賀五十三家」と呼ばれるものとなり、「甲賀郡中惣」という郡域全体の連合体へと発展していくわけです。

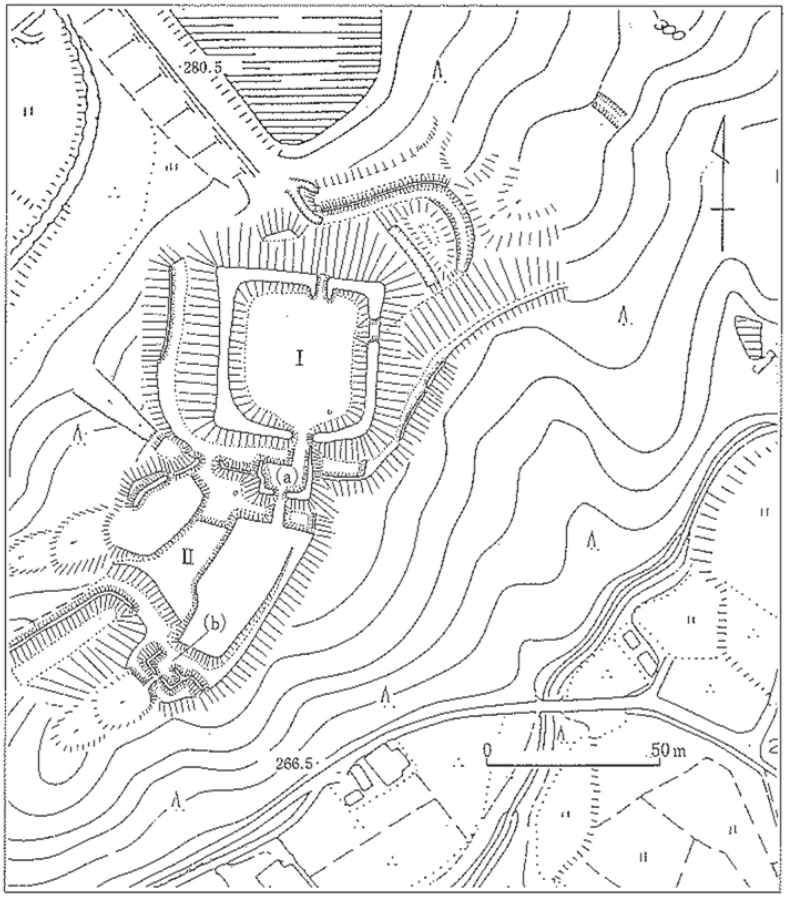
さて甲賀郡内の古城跡をみていきますと、丘陵先端部を削り込んだ方形単郭の館城タイプが大半を占めています。つまり「郡中惣」という小領主の同盟関係から同規模の城郭が密集し、突出した大規模な城郭が認められないということがわかります。

望月城

このような郡中惣の城として典型的なものが甲南町杉谷に所在する望月城でしょう。城の中心部、近世城郭でいう本丸に相当する主郭は東西50ｍ、南北45ｍのほぼ方形で、丘陵を深く削り込み、摺鉢状となっています。主



望月城跡（Ａ）、望月支城跡（Ｄ）概要図（福島克彦氏原図）



土山城跡概要図

郭の周囲は削り残された高さ６ｍにおよぶ巨大な土塁とその外側には空堀が周囲にめぐらされています。主郭の東側に虎口（城の入り口で木戸とも呼ばれます。）が設けられており、空堀には土橋が架けられています。

なお望月城は単純な単郭の方形館城ではなく、主郭空堀の外側に副郭も設けており、特に北側は半月形となり土塁が築かれています。さらに西方尾根続きには空堀が一条穿たれ、後方の防御を固めています。

ところでこの望月城と浅い谷をへだてて、わずか50ｍの尾根上に支城跡が位置しています。現在一般に支城と呼称されていますが、望月城と共存するものなのか、従属関係にあるものなのか、あるいはまったく別の領主の城なのかは不明としかいいようがありません。さらに支城といいつつもその規模は望月城とほぼ同じです。ただ土塁の規模は支城が高さ２～３ｍと望月城に比べて低くなっています。

このように同タイプの城が隣接して築かれている例は望月城以外にも甲賀郡内では多く見ることができます。たとえば甲西町の丸岡城と東丸岡城、甲南町の新宮城と新宮支城あるいは水口町の西迎山城と東迎山城などです。

おそらくこれらの隣接する２つの城は従属関係を示すものではなく、「郡中惣」という共同の同名中の領主達の城を如実に示しているのではないでしょうか。

甲賀郡中惣の１つである大原同名中に残されている掟書には、「他所と弓矢出来之時は、手はしの城工番等入事在之者、各致談合、人数をさし入可申候」とあり、敵が侵入して来た場合、同名中の領主達が最前線の城へかけつけるよう取り決められていたことがわかります。

方形単郭の館城タイプや隣接して同規模の城が２～３併列するのが甲賀郡の特徴といえますが、これは隣国の伊賀や大和の東山内、あるいは京都洛西の西岡地方などでも認められます。これらの地域は甲賀郡と同様に、伊賀惣国一揆・東山内一揆、西岡惣国と呼ばれる惣国体制の地域なのです。同規模の館城タイプが大半を占めるということは、まさに小領主の共同意識がそのまま城の構造に表われているものといえるでしょう。

望月城は甲賀郡内でも典型的な方形館城タイプではありますが、城主をはじめ城に関する一切の歴史を伝える資料は残っておりません。

土山城

土山町北土山に所在する土山城もそんな方形館城タイプの一つです。望月城と同様に、城の歴史を伝える文献資料はまったく残っていません。わずかに『甲賀郡志』に頓宮（とんぐう）氏の一族、土山鹿之介が築城、天正年中に廃城と記載されています。

城跡は北土山集落背後の丘陵上に見事にそ

の遺構を残しています。一見したところ、望月城をはじめとする甲賀郡内の単郭館城タイプですが、主郭南方虎口の前方に10m×10mほどの小さな曲輪が突出して設けられていることが注目されます。

これはいわゆる「馬出し」と呼ばれる施設で、戦国時代後半に発達した城の虎口を守る橋頭堡ともいうべきものです。特に甲斐の武田氏が丸い馬出しを用いていることが有名です。土山城ではこの馬出し虎口のさらに前方60mの地点に同様に土塁で囲まれた虎口があります。これは尾根筋から攻めてくる敵に対する正面を防御するとともに、西側谷道から攻めてくる敵に対しては武者隠し的な施設となるものと考えられます。

この馬出しという施設は他の甲賀郡内の数ある城跡には存在しません。この状況はなにを意味しているのでしょうか。望月城の主郭と土山城の主郭はほぼ同規模であるにもかかわらず、一方は当時の最高築城技術ともいうべきテクニック ― 馬出し ― を用いているのは時代の差ではなく、築城主体者に大きな違いがあるのではないかと考えられます。つまり土山城の築城者はどうも甲賀郡中惣の同名中といった小領主ではないようです。

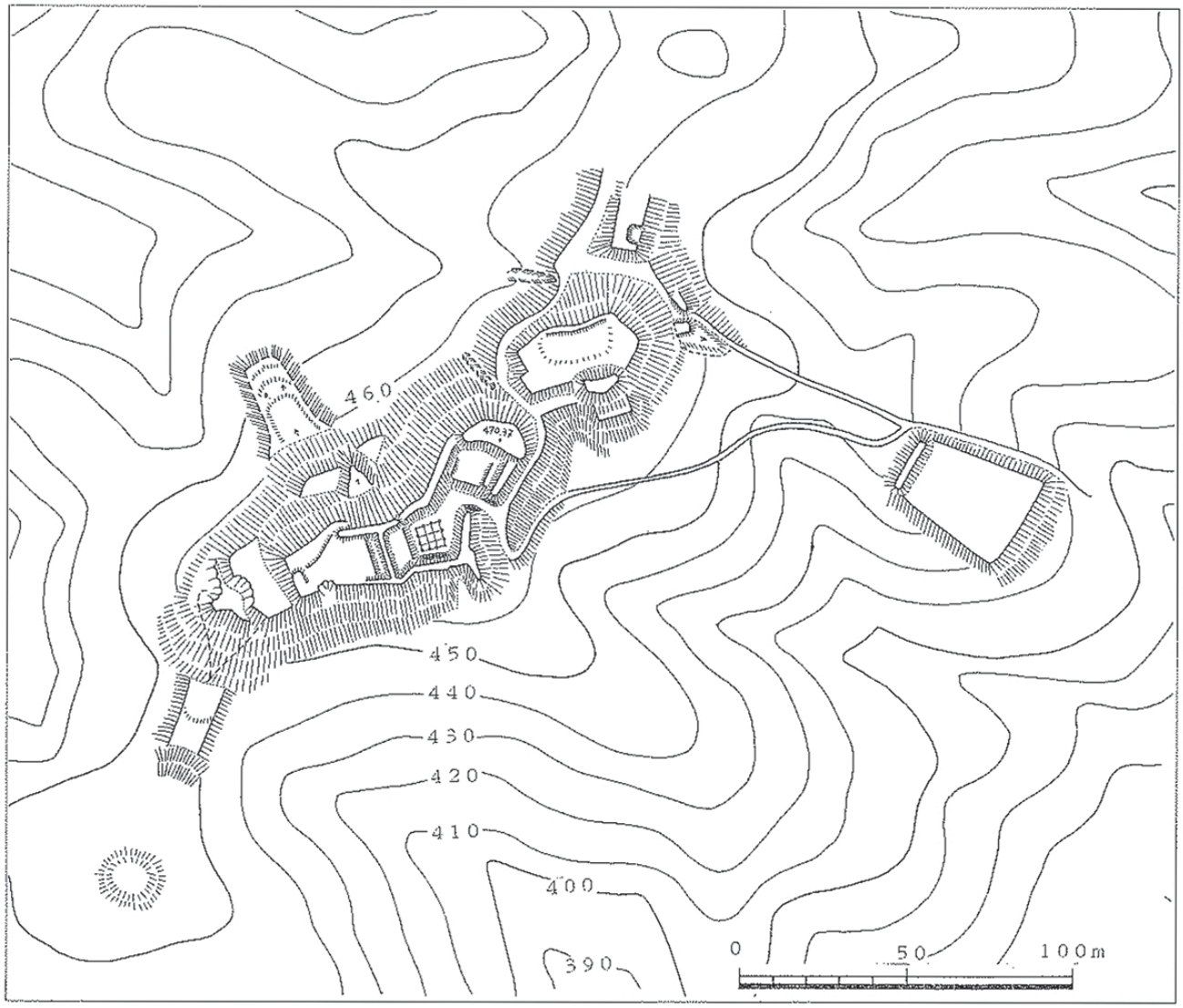
土山城跡主郭虎口の土橋

小川城跡の虎口（左端）と主郭の土塁

今考えられることは元亀元年(1570)織田信長が甲賀郡に進攻した時に、それまであった方形単郭の土山城を、織田軍が前線基在として利用したのではないかということです。馬出し虎口はこの段階で、防御を強化するために織田軍が新たに改修した可能性が高いようです。現在滋賀県内でこの馬出しという高度な築城技術の認められるのは、愛東町の井元城と、余呉・木之本両町に分布する賤ヶ岳城塞群の一部とこの土山城だけという貴重なものです。

小川城

甲賀郡の最南端、信楽町小川の標高470.37m（麓からの比高130m）の城山山頂に小川城跡は位置しています。他の甲賀郡内の方形単郭の館城タイプとは違い、山頂部を段々に削平して曲輪を設けた山城です。1978～79年には発掘調査が実施され、主郭中央部で、



小川城跡概要図

南北５間、東西４間の礎石建物が検出されました。さらにこの建物内側に東西３間、南北２間の礎石建物も検出されました。この内側の建物は礎石が小さく、束柱を持つことから土倉状の塗壁構造となるようで、事実調査ではスサ入りの壁土が多量に出土しています。このように主郭中央には、内側に土倉を包みこむような特異な構造の建物があったようです。しかし瓦はまったく出土しておらず、板葺の建物だったようです。

小川城も基本的には土で構成されていた城ですが、主郭の内側部分だけは３～４段に積まれた石垣が認められ、礎石建物とともに近世城郭に近い形態であったことがわかります。

主郭の虎口は西側にあり、石垣と門の礎石が認められます。この虎口は「くい違い」となっており、直進して主郭に入れないように工夫されています。

発掘調査によって出土した遺物に目を向けると、美濃・信楽といった国産陶器や土師器皿などが出土しています。美濃産陶器は大窯編年でいうII～III期、つまり16世紀後半のものであろうと考えられ、小川城の築城が戦国時代であることが判明しました。

小川の地には平安時代末期に甲賀伴一党の小川氏が興福寺領信楽庄下司職となり、後に小川城を築いたとか、鶴見氏が築いたと伝えられていますが、現在残る城跡は出土遺物から戦国時代のものであり、文献資料とあわせてみると、多羅尾光俊によって天正年間に築

かれたものと思われます。

天正年間に築かれた城は県内だけに目を向けても豊臣秀次の近江八幡城、中村一氏の水口岡山城、織田信長の安土城、織田信澄の大溝城などがあります。これらの城跡には縄張りや虎口に斉一性が認められ、すべてに高い石垣が用いられています。このような城跡を一般に織豊系城郭と呼んでいますが、小川城はどうもようすが違うようです。近江八幡城や水口岡山城が秀吉の一門や有力家臣が築いた主流の織豊系城郭であるのに対し、小川城では斉一性の認められないことから、近江の一在地領主 ― 多羅尾氏 ― が築いた、在地性のきわめて強い、いいかえれば亜流の織豊系の城郭と呼べましょう。

天守に類する礎石建物、石垣に近い急傾斜の土塁外壁の切岸などは、在地領主が織豊系城郭の水準を受容した結果と指摘できます。

水口岡山城

水口町には碧水(へきすい)城と呼ばれる著名な水口城があります。この水口城とは別にもう１つの水口城があったことは案外知られていません。このもう１つの水口城は碧水の水口城と混同をさけるため、水口岡山城と呼ばれています。

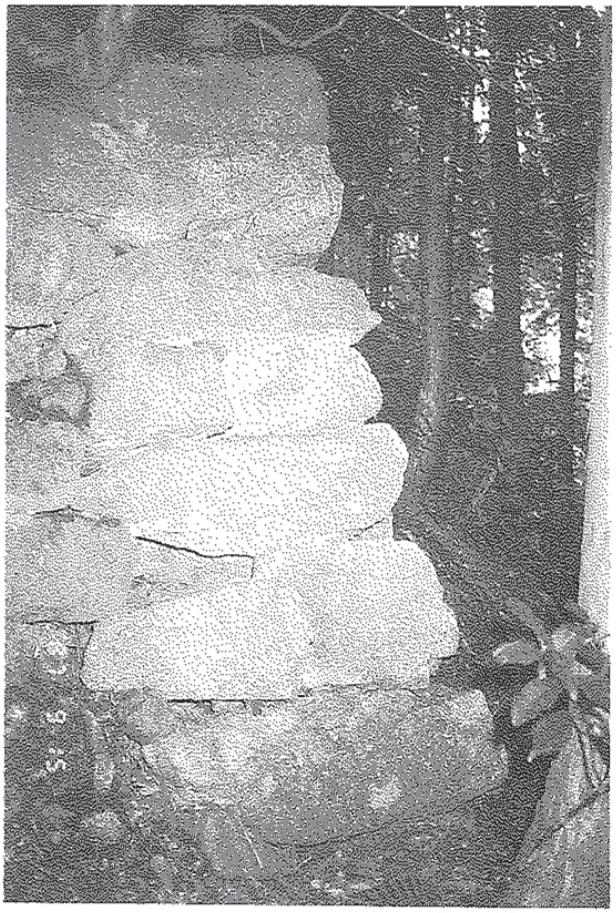
水口岡山城は標高282ｍ(麓からの比高100ｍ）の大岡山山頂に位置しています。

天正13年（1585）豊臣秀吉より甲賀支配を賜わった中村一氏が初めて築城したものです。水口の地は甲賀郡のほぼ中央に位置し、古代からの幹線路である東海道が通っており、交通の要衝の地でした。大岡山はこの水口の独立丘で、山頂からは郡内が一望に見わたせる軍事的に重要な地でした。城主は天正18年（1590）中村一氏が駿河転封後、秀吉の側近で五奉行の一員である増田長盛、長束正家がそれぞれ城主となっています。これを見ると秀吉がいかに水口岡山城を重要視していたかわかります。慶長５年（1600）関ヶ原合戦で、時の城主長束正家は西軍石田三成方に属し敗れたため、水口岡山城も廃城となり、寛永９年（1632）碧水水口築城に際して石垣の石材も持ち運ばれてしまったと伝えられています。

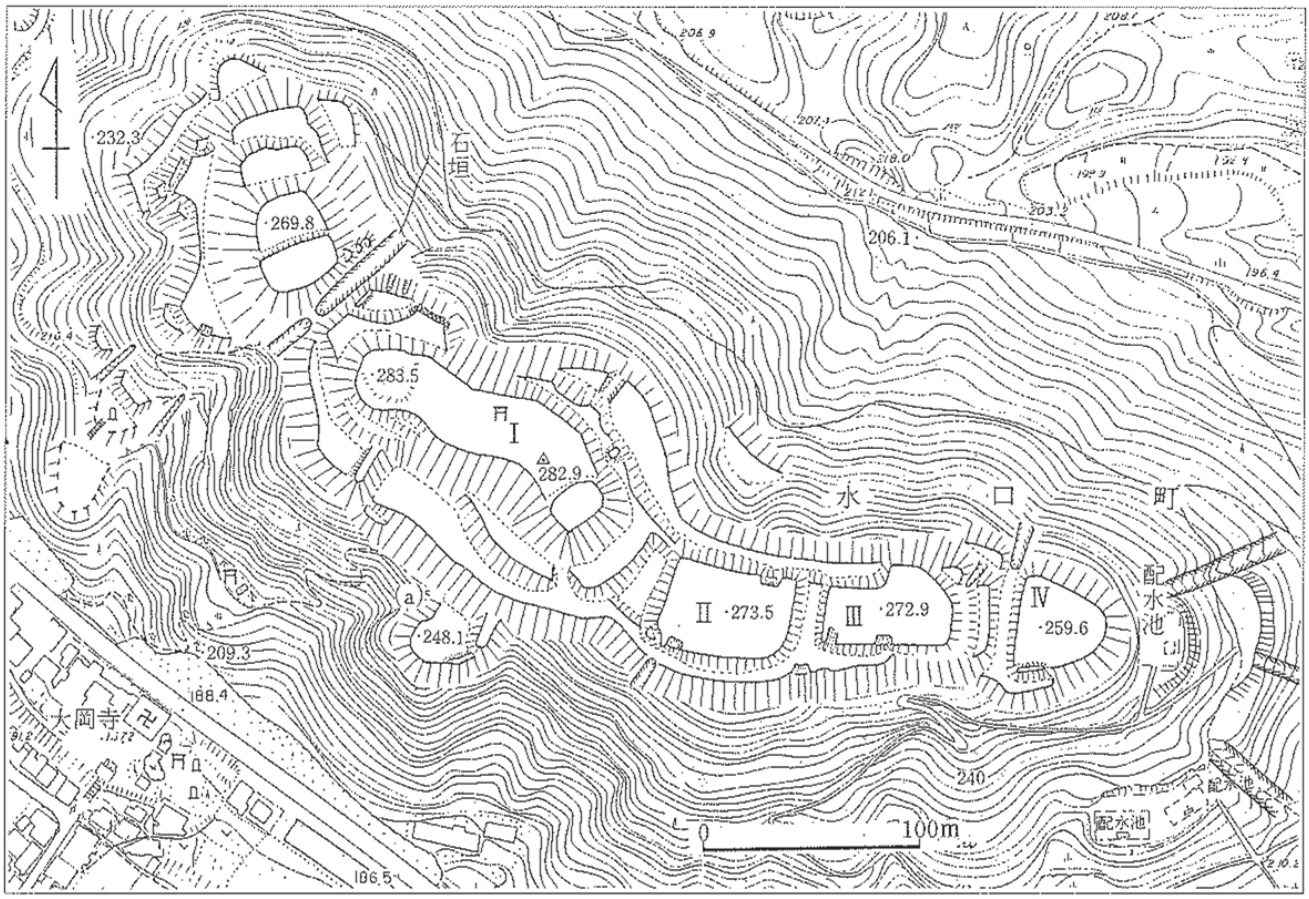
なお水口岡山城が存続していた頃には単に水口城と呼称されていたことが城下本正寺の半鐘銘から判明しています。さらに大岡山南山麓には城下町も形作られていたことが現存する地名や地割りから判明しています。

城跡は『近江輿地志略』に「西の麓より本丸に至りて四町許、之を追手といふ。東の麓より本丸に至て三町五十一間之を搦手といふ。此北麓に至て二町二十一間なり。山頂の本丸方十三間、二の丸三十二間半に二十一間、西の丸二十四間に二十三間、三の丸二十五間に十七間、総巡り二十七町三十間に至る、今に其形あり。今は富城主の山林となりてあり。」としるされています。近世水口藩時代、大岡山は藩の御用林となったため、石垣の石材は持ち去られましたが、当時の形状は今でも良好に残っています。

曲輪の配置は、山頂部東西方向に主要な６



水口岡山城跡の石垣



水口岡山城跡概要図

ヶ所の曲輪を配し、それぞれを堀切、竪堀によって区切っています。各々の曲輪の隅や壁面は鋭角となっており、石垣がめぐらされていた時は非常に直線的なラインを有していた城、いいかえれば近世城郭的な城であったことがわかります。

虎口部分は破壊が激しく現在判然としませんが、各曲輪には凹部があり、内枡形という直進して城内に入るのを防ぐ虎口であったと考えられます。さらに主郭の南山腹部に突出した小さな曲輪がありますが、ここは土塁によってしっかり固められており、大手虎口の枡形と考えられます。

このように水口岡山城は小川城と同時代に築かれたものですが、さらに一歩進んだ水準の築城技術が随所に認められます。これは前にも触れたように、豊臣秀吉の直属家臣である中村一氏の築城によるものであったからといえます。小川城が在地色の強い天正期の城郭というならば、水口岡山城は秀吉政権の甲賀支配の拠点というべき城であったのです。

さらに小川城では認められなかった高石垣の存在することが、織豊系の本流の城であったことを何よりも強く物語ってくれます。近世に破却を受けて石垣の残りは良くありませんが、城跡の背面、北側には高さ２～３ｍに達する石垣が部分的に残存しています。安土城とならんで天正時代の高石垣の残る全国でも数少ない例で、当時の石垣構築技術を知るうえで、貴重な資料といえましょう。また城跡には瓦片も散乱しており、漆喰造りの強固な建物があったと想像されます。

このように甲賀郡内の古城は、郡中惣の小規模な館城や、在地領主の城を改修した織豊系の城、あるいは織豊系の築城技術を受容した在地の天正期の城、さらには織豊系の本流の城といったものがすべて認められる地域として、実に興味のつきない地域といえます。

（中井　均氏提供）